

# 山王若宮Ⅲ遺跡

老人保健施設増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2001

前橋市埋蔵文化財発掘調査団



調査区全景 (東から)



山王若宮遺跡出土遺物

## 序

前橋市は、雄大な裾野を広げる赤城山を背に、板東太郎として名高い利根川や詩情豊かな広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情にあふれた美しい県都です。

前橋市域の赤城山南麓と前橋台地上には、旧石器時代から近世、近代に至るまで、人々の生活の痕跡を示す遺跡が数多く存在します。特に古墳においては、かつて市域に800余基の存在していたことが伝えられています。その中には大室四古墳をはじめ国指定史跡となっている古墳も9基含まれ、東国古墳文化の中心として位置づけられました。また、統く律令政治の時代に入ると、山王庵寺、上野国分僧寺、上野国分尼寺、上野国府の存在が示す通り、政治、宗教、経済の中心地として花開き一大文化圏が形成されました。さらに中世においては、戦国武将の長尾氏・上杉氏・武田氏・北条氏が鎮をけざった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏・松平氏が居城した関東三名城の一つに数えられる既橋城が築かれました。まさに、前橋はこれまで連続と続いてきた歴史を物語る様々な文化財で溢れています。

今年度発掘調査を行いました山王若宮Ⅲ遺跡は、前橋市の南東部に位置し広瀬古墳群の中にあります。本遺跡は、古墳時代前期の住居跡や終末期の7基の小円墳が検出された山王若宮遺跡（平成9年度）、古墳時代前期の住居跡が検出された山王若宮Ⅱ遺跡（平成12年度）に隣接しております。この地区では今までの調査において、古墳時代の住居跡や古墳等が発見されています。本遺跡では、古墳時代の住居跡の他に中世の生活跡が確認できる遺構面が検出され、この地区的今まで知られていない貴重な資料を得ることができました。

発掘調査にあたりましては、ご協力いただきました医療法人社団 清宮医院 理事長 清宮和之氏、地元関係者、調査に従事されました皆様に感謝とお礼を申し上げます。

平成14年3月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長 阿部 明雄

## 例　　言

1. 本報告書は、老人保健施設増築工事に伴う山王若宮遺跡発掘調査報告書である。
2. 本遺跡の遺跡コードは13G18である。
3. 調査主体は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団である。
4. 発掘調査の要項は次のとおりである。

調　　査　　場　　所	群馬県前橋市山王町134他
発　　掘　　調　　査　　・　整　　理　　期　　間	平成13年7月10日～平成14年3月22日
發　　掘　　・　整　　理　　担　　当　　者	齊木一敏・近藤雅順・高山剛（発掘調査係員）
5. 本書の原稿執筆・編集は齊木・近藤が行った。
6. 発掘調査・整理作業にかかわった方々は次のとおりである。

石原義夫・岩木操・狩野良夫・岸フクエ・角田愷・渡木秋子・中澤光江  
平林しのぶ・湯浅たま江・湯浅道子
7. 発掘調査で出土した遺物は、当発掘調査団より前橋市教育委員会に保管を依頼し、前橋市教育委員会文化財保護課で管理されている。

## 凡　　例

- ・ 挿図中に使用した北は、座標北である。
2. 挿図に国土地理院発行の1/200,000地形図（宇都宮）、1/25,000地形図（前橋、高崎、伊勢崎、大胡）と1/2,500前橋市現形図を使用した。
  3. 本遺構及び遺構施設の略称は、次のとおりである  
H…住居跡　W…溝跡　D…土坑　P…柱穴　I…井戸跡
  4. 遺構・遺物の実測図の縮尺は、次のとおりである。

遺構	全体図…1/100	住居跡・溝跡・土坑・柱穴・井戸跡…1/60
遺物	土器…1/3	石製模造品…1/1
  5. 計測値については、（　）は現存値、〔　〕は復元値を表す。
  6. スクリーントーンの使用は次のとおりである。

遺構断面図	構築面…斜線
-------	--------

# — 目 次 —

## 序

I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の位置と環境	
1 遺跡の立地	1
2 歴史的環境	1
III 調査の方針と経過	
1 調査方針	5
2 調査経過	5
IV 基本層序	6
V 遺構と遺物	7
VI 考察	10

## 図 版

- 口絵 1 調査区全景（東から）  
2 山王若宮Ⅲ遺跡出土遺物

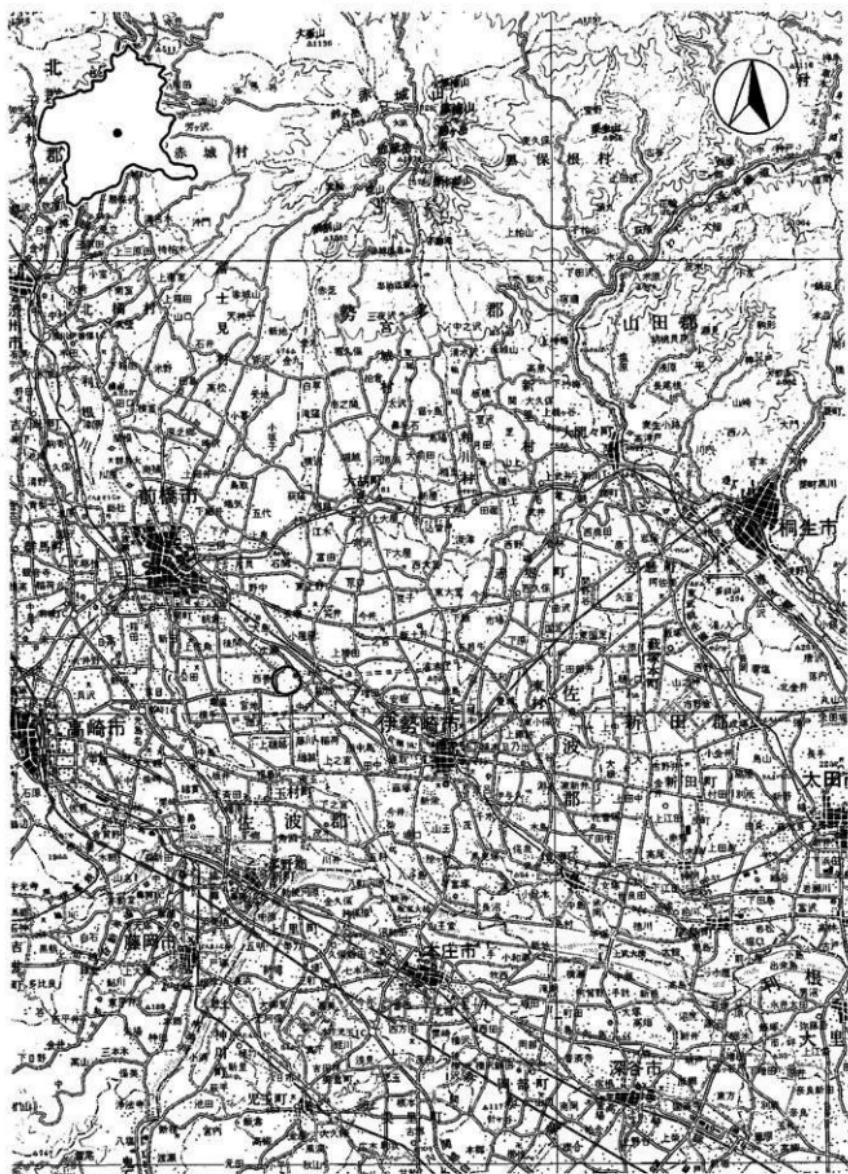
- PL. 1 調査区全景、H-1・2・3号住居跡全景、H-1号住居跡全景、H-1号住居跡P<sub>1</sub>号柱穴全景、  
H-2号住居跡全景  
2 H-2号住居跡出土遺物、H-2号住居跡P<sub>1</sub>号柱穴出土遺物、H-3号住居跡出土遺物、  
H-5号住居跡P<sub>1</sub>号柱穴（貯藏穴）出土遺物、H-5号住居跡P<sub>1</sub>号柱穴（貯藏穴）全景、  
W-1号溝跡全景、I-1号井戸跡石の落ち込み全景、I-1号井戸跡全景  
3 H-1・2号住居跡、グリッド出土遺物  
4 H-2・3・5号住居跡出土遺物

## 挿 図

Fig.	頁	Fig.	頁
1 山王若宮Ⅲ遺跡位置図	iv	2 位置図と周辺遺跡図	3
3 山王若宮Ⅲ遺跡調査区設定図	4	4 基本土層	6
5 山王若宮Ⅲ遺跡全體図	13・14		
6 H-1～3号住居跡、W-4号溝跡、D-1号土坑、P-1号柱穴			15・16
7 H-4～6号住居跡、W-1・2・5号溝跡			17・18
8 H-1・3号住居跡、グリッド出土遺物			19
9 H-2・5号住居跡、I-1号井戸跡出土遺物			20

## 表

- Tab.  
1 山王若宮Ⅲ遺跡の住居跡とその時期  
2 出土遺物観察表



1 : 200,000

0 5 10 15 20 km

## I 調査に至る経緯

本遺跡の発掘調査に関して、平成13年6月29日付けで医療法人社団 清宮医院 理事長 清・宮和之より山王町地内の老人保健施設（山王ライフ）増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査依頼が、前橋市教育委員会に提出された。本調査地は、平成9年度・12年度に本施設の建設及び増築工事にあたり発掘調査を実施した個所に隣接しており、遺跡地であることが予想された。

前橋市教育委員会ではこれを受けて、内部組織である前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団長 阿部明雄に対し、調査実施を通知し、調査団はこれを受諾した。平成13年7月9日、調査依頼者である医療法人社団 清宮医院 理事長 清宮和之と前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団長 阿部明雄との間で、本発掘調査の委託契約を締結した。現地での発掘調査は、7月11日から重機を投入し、開始するに至った。なお、遺跡名称『山王若宮Ⅲ遺跡』の『若宮』は旧地籍の小字名を採用し、ローマ数字の『Ⅲ』は平成9年度・12年度に実施した調査と区別するために付したものである。

## II 遺跡の位置と環境

### 1. 遺跡の立地

山王若宮Ⅲ遺跡は、前橋市街地より南東へ約6km、前橋市立山王小学校と道を隔てた北側の前橋市山王町134他に位置する。前橋市は、地質・地形から北東部の赤城火山斜面、南西部の前橋台地、東部の広瀬川低地帯、そして南部の現利根川氾濫原の四つの地域に分けられる。本遺跡は前橋台地の東端部の微高地上にある。調査区の東には旧利根川河川敷の広瀬川低地帯が広がっていることから、南東方向に僅かに下っている。

調査区周辺は、かつて一面に水田の広がる農村地帯であったが、宅地開発や幹線道路の整備等に伴い、現在は調査区西側に水田地帯を残す程度である。宅地開発においては、市街地より比較的近い利点からめざましい発展を遂げ、本遺跡が所在する山王町、北に広がる広瀬町や朝倉町では高層の市営住宅等が建設されている。また、本遺跡東側の広瀬川低地帯も閑静な住宅地域となっている。

周辺を走る主要幹線としては、南へ約700mのところに県道高崎駒形線が走る。交通量は市内でも1、2位を誇るほどの道路で、ファミリーレストランや大規模小売店が進出する等開発事業が目立っている。さらに南下すると、平成13年開通の北関東自動車道があり、インターチェンジも近くに設置され、さらなる整備・開発が進むものと思われる。

### 2. 歴史的環境

本遺跡及び山王若宮遺跡、山王若宮Ⅱ遺跡において、主に古墳時代の遺構が検出されており、古墳時代に絞ってみた。本遺跡周辺は、群馬県内でも有数の古墳分布地帯「広瀬古墳群」に属する。「広瀬古墳群」は、朝倉町を中心とする地域、広瀬町を中心とする地域、そして、山王

町を中心とする地域の三つに分けられる。昭和13年発行の「上毛古墳綜覧」によると、昭和10年の古墳調査では、この地域である旧勢多郡上川洞村・旧佐波郡上陽村には154基の古墳が確認されている。しかし、その多くは、戦中・戦後の開拓や近年の開発造成などにより調査することなく平夷されてしまった。そのため、調査によりその全容が明らかになっているものや当時のままの姿を残しているものは極めて少ない。本遺跡の属する山王地域では、「上毛古墳綜覧」には34基の古墳が存在していたと記されているが、現在では、本遺跡北西約300mのところに金冠塚古墳、文殊山古墳、阿弥陀山古墳がその形をとどめる程度である。

「広瀬古墳群」の時代を追ってみると、まず、古墳時代前期（4世紀代）のものに、群馬県内でもその時代を代表するものとして有名な八幡山古墳（国指定史跡、4C後半）と前橋天神山古墳（県指定史跡、4C後半）がある。前者は全長約130mで東日本最大の前方後方墳であり、後者は全長約129mで東日本最古の前方後円墳である。前橋天神山古墳からは三角縁神獸鏡をはじめとする豊富な副葬品が出土し、当時、既にこの前橋台地に支配権を確立していた有力な地域首長の存在がうかがえる。また、これに先行する2段の基壇を持つ円墳の朝倉2号墳（4C前半）等がある。

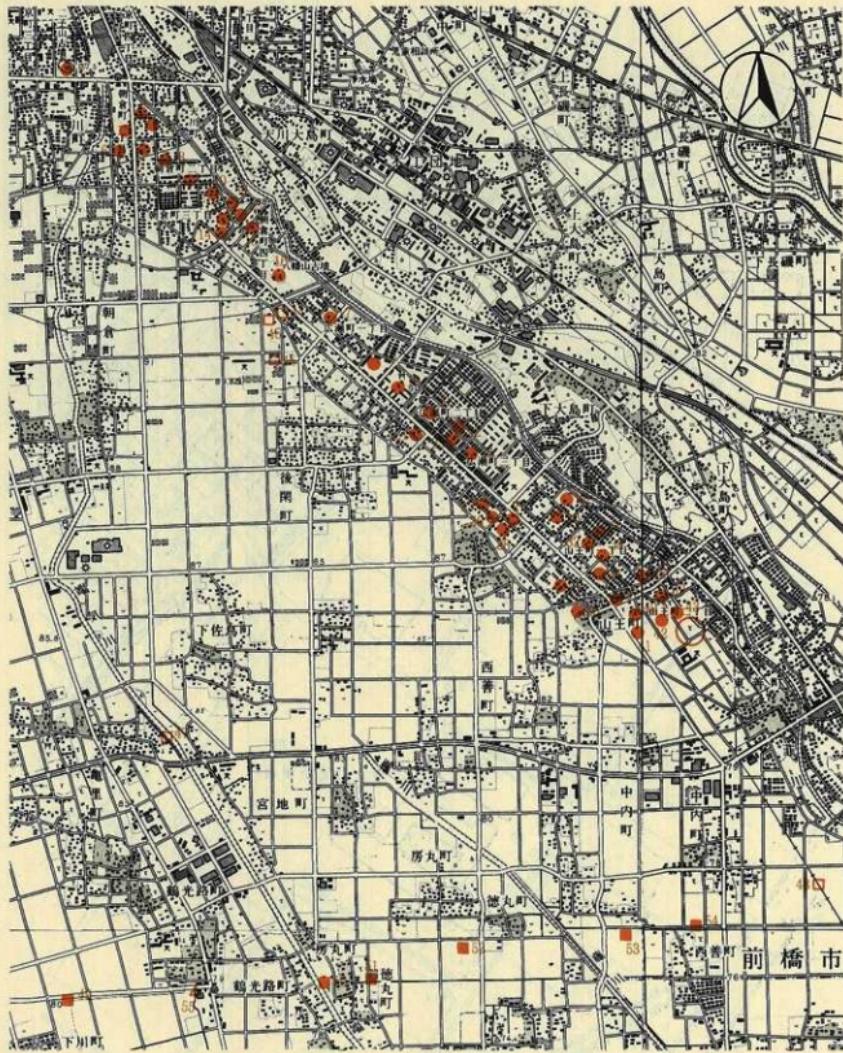
古墳時代中期（5世紀代）の古墳となると数が少ないが、県内でも貴重な帆立貝式古墳の龜塚山古墳（市指定史跡、6C前半）があげられる。ほかに、前方後円墳の上陽17号墳（5C後半～6C前半）や上陽24号墳（6C前半）、小且那古墳（6C前半）等がある。

古墳時代後期（6世紀代）になると再び古墳の造営が活発化し、天川二子山古墳（国指定史跡、6C末）、上両家二子山古墳（7C初）、長山古墳（7C前半）のような大規模な前方後円墳が造られた。その中でも有名なのが金冠塚古墳（市指定史跡、6C後半）で、県内でも例のない金銅製の冠が出土した。

終末期（7世紀代）は円墳の小型化が進んで、狐塚古墳（7C）、上陽10号墳（7C初）、朝倉1号墳（7C初）等の直径10～20m前後の小円墳が点在している。そんな中で、山王大塚古墳（7C初）や大塚北古墳（7C末）のような径30mの円墳も造られている。

さて、古墳時代の集落では、本遺跡から約2.8km西の川曲遺跡で、古墳時代中期の住居跡1軒が検出された。本遺跡約2.5km北西の後閑団地遺跡では古墳時代前期の住居跡5軒、石榔墓1基、土坑1基、溝跡5条、また、後閑Ⅱ遺跡では古墳時代後期の住居跡1軒、土坑3基、溝跡3条が検出された。さらに、坊山遺跡では古墳時代後期の住居跡1軒が検出された。その他に、横手湯田遺跡、鶴光路櫻橋遺跡、徳丸高堰遺跡、徳丸仲田遺跡、西善尺司遺跡、中内村前遺跡、前田遺跡等がある。

生産遺跡では、As-C混層下水田跡が櫛島川端遺跡・公田東遺跡・公田池尻遺跡、村中遺跡、鶴光路櫻橋遺跡、徳丸高堰遺跡、中内村前遺跡で検出されている。Hr-FA下水田跡は櫛島川端遺跡・公田池尻遺跡、横手湯田遺跡、徳丸高堰遺跡、徳丸仲田遺跡、西善尺司遺跡、中内村前遺跡で検出されている。また、Hr-FFP下水田跡では、横手湯田遺跡や北西に主軸方向を向ける小区画の水田跡と水路・支水路へ分水する堰と思われる杭列などが検出された徳丸仲田遺跡がある。



1. 山王若宮II・III遺跡  
5. 小旦那古墳  
9. 長山古墳  
13. 小林山古墳  
17. 前橋天神山古墳  
21. 上川瀬113号墳  
25. 上向北二子山古墳  
29. 亀原山古墳  
33. 大塚山古墳  
37. 上羅19号古墳  
41. 阿修陀山古墳  
45. 後岡田遺跡  
49. 横手湯田遺跡  
53. 西善尺司遺跡
2. 天川二子山古墳  
6. 朝倉古墳  
10. 朝倉1号墳  
14. 鶴巻塚古墳  
18. 上川瀬96号墳  
22. 行人塚古墳  
26. 佐賀塚古墳  
30. 上羅24号墳  
34. 金城塚古墳  
38. 羽場塚古墳  
42. 亂塚古墳  
46. 後岡三遺跡  
50. 鶴光路復興遺跡  
54. 中内村前遺跡
3. 朝倉天神山古墳  
7. 上川瀬18号墳  
11. 蘭石古墳  
15. 上川瀬54号墳  
19. 板玉塚古墳  
23. 上川瀬111号墳  
27. オリワカ塚古墳  
31. 上羅27号墳  
35. 鶴巻塚古墳  
39. 上羅17号墳  
43. 上羅10号墳  
47. 川曲遺跡  
51. 徳丸高理遺跡  
55. 村井遺跡
4. 上川瀬26号墳  
8. 朝倉2号墳  
12. 朝倉3号墳  
16. 八幡山古墳  
20. 大屋敷古墳  
24. 鶴巻山古墳  
28. ボンゼン山古墳  
32. 大塚北古墳  
36. 鶴巻寺東  
40. 鶴巻寺西  
44. 坂山遺跡  
48. 関田蓮蓬(事彰園)  
52. 徳丸仲田遺跡

(●…古墳、□…古墳時代の住居跡、■…古墳時代の住居跡・水田跡、△…古墳時代の水田跡)

Fig. 2 位置図と周辺遺跡図

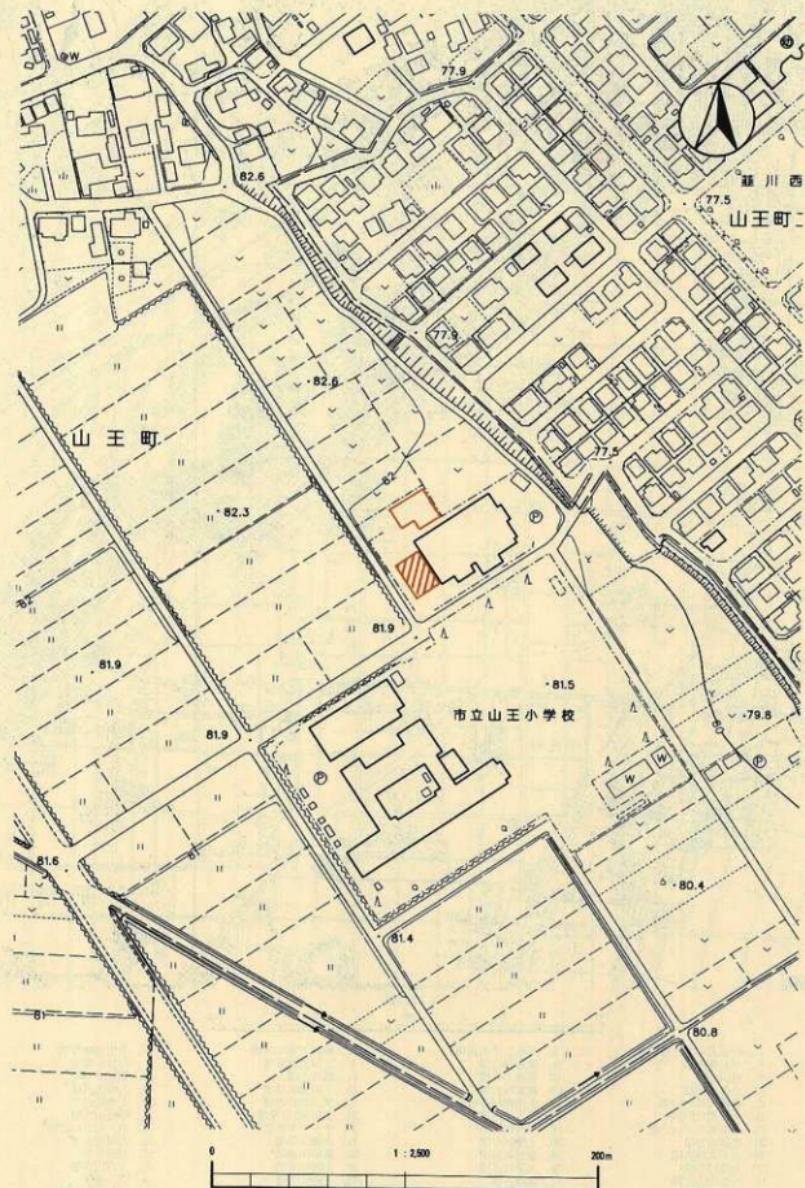


Fig. 3 山王者宮III遺跡調査区設定図

### III 発掘調査の方針と経過

#### 1. 調査方針

今回委託された調査箇所は、現在立地する老人保健施設（山王ライフ）の西に接する増築部分で、調査面積は約285m<sup>2</sup>である。グリッドについては、平成12年度のグリッドを基準に、4mピッチで西から東へX0、X1、X2、・・・、北から南へY19、Y20、Y21、・・・と番付し、グリッドの呼称は北西杭の名称を使用した。

X2・Y21グリッドの公共座標は、

第区系 X = +38,716.000m, Y = -63,342.000m

緯度36° 20' 48" .8375、経度139° 07' 39" .2095

子午線収差角25° 05" .9、増大率0.999949 である。

調査方法は、表土掘削・遺構確認・杭打ち・遺構掘り下げ・遺構精査・測量・全景写真撮影の手順で行った。

図面作成は、平板・簡易通り方測量を用い、遺構平面図は原則として1/20の縮尺で作成した。遺物については平面分布図を作成し、遺物台帳に各種記録をしながら収納した。包含層の遺物はグリッド単位で収納し、重要遺物については分布図・遺物台帳に記載を行い収納した。

#### 2. 調査経過

試掘調査の結果から、二面での本調査が必要なことが分かった。しかし、短い調査期間であるということから次のようないかたの計画を作成した。中央から北側に広がるAs-B軽石硬化面を残し中世の遺構を調査し、硬化面のない南東の一画をもう一層下げ古代の遺構を調査することとした。平成13年7月11日に重機（バックフォー0.4m<sup>3</sup>）1台と10tダンプ1台で表土掘削を開始した。まず、南西側から約50cm掘り下げたところで赤褐色の硬化面を確認した。さらに、赤褐色の硬化面のない南東側を約100cm掘り下げた。7月12日から鋤簾をかけ、プラン確認を行った。その結果、中世の基壇状の遺構と住居跡6軒、溝跡5条等が検出された。

遺構確認を終えた後、調査区内にグリッド杭・ベンチマークの設置を行い、遺構の掘り下げ・精査に入った。今年の7月は猛暑が続いたが、雨に降られることなく調査を続けることができ、順調に平板測量、遺構写真撮影等を行った。なお、調査区の全景写真は、7月27日に隣接する老人保健施設（山王ライフ）の屋上を借り撮影させていただいた。その後、出土遺物の洗浄等を行い、8月3日現地調査の全てを終了した。

整理作業については、前橋市三俣町に所在する前橋市教育委員会文化財保護課整理作業室にて行った。

## IV 基本層序

本遺跡の立地する前橋台地は、今から約2万年前の浅間山山体崩壊に起因する泥流堆積物とその上に堆積する水成ローム層により構成されている洪積台地である。

・本調査での基本層序は、調査区東壁中央のところで確認した。

表 土	
I 層 カクラン	厚さ35cm前後
II 層 灰黄褐色細砂層 (10YR 4/2)	
締まり○ 粘性○	
旧耕作土	
厚さ10cm前後	
III 層 褐色細砂層 (10YR 4/4)	
締まり○ 粘性△	
As-B軽石混土層	
厚さ20cm前後	
IV 層 黒褐色微砂層 (10YR 3/1)	
締まり○ 粘性○	
Hr-F P軽石わずかに含む。	
厚さ30cm前後	
V 層 黄褐色細砂層 (10YR 5/8)	
締まり○ 粘性○	
Hr-F Aブロックを含む。	
厚さ10cm前後	
VI 層 黒褐色微砂層 (10YR 3/2)	
締まり△ 粘性○	
As-C軽石含む。	
厚さ10cm前後	
VII 層 暗褐色細砂層 (10YR 3/3)	
締まり○ 粘性○	

Fig. 4 基本土層

## V 遺構と遺物

### 1 堅穴住居跡

#### H-1号住居跡 (Fig. 6, PL. 1)

位置 X 2~4、Y 21~23グリッド 主軸方向 (N-74° - E) 形状等 正方形と推定される。東西 (6.80) m、南北 6.76m、壁現高43cmを測る。面積 (37.61) m<sup>2</sup> 床面 平坦な床面。

P<sub>1</sub> (長軸×短軸×深さ、形状: 40×27×20cm、楕円形) と P<sub>2</sub> (長軸×短軸×深さ、形状: 153×107×54.5cm、楕円形、貯蔵穴) の 2 基を検出した。竈 調査区外に南寄りの東竈があると推定される。重複 H-2・H-3 と重複しており、新旧関係は H-2・H-3 → 本遺構の順である。時期 埋土や出土遺物から 5 世紀終末から 6 世紀初頭と考えられる。出土遺物 総数 1,392 点。そのうち、土器 7 点、石製模造品 1 点を図示した。

#### H-2号住居跡 (Fig. 6, PL. 1)

位置 X 3~4、Y 21~23グリッド 主軸方向 (N-156° - E) 形状等 方形と推定される。東西 (3.70) m、南北 5.67m、壁現高28cmを測る。面積 (17.77) m<sup>2</sup> 床面 平坦な床面。周溝有。P<sub>1</sub> (長軸×短軸×深さ、形状: 48×37×45cm、楕円形)、P<sub>2</sub> (長軸×短軸×深さ、形状: 57×48×44cm、楕円形)、P<sub>3</sub> (長軸×短軸×深さ、形状: 83×44×20.5cm、楕円形)、P<sub>4</sub> (長軸×短軸×深さ、形状: (66) × (54) × (20.5) cm、(楕円形)、貯蔵穴)、P<sub>5</sub> (長軸×短軸×深さ、形状: 33×29×45cm、円形)、-P<sub>6</sub> (長軸×短軸×深さ、形状: 40×25×37.5 cm、楕円形)、P<sub>7</sub> (長軸×短軸×深さ、形状: 23×16×24.5cm、楕円形) の 7 基を検出した。

炉 長軸 (67) cm、短軸 (38) cm を測る。重複 H-1 と重複しており、新旧関係は本遺構 → H-1 の順である。時期 埋土や出土遺物から 4 世紀終末と考えられる。出土遺物 総数 486 点。そのうち、土器 8 点を図示した。

#### H-3号住居跡 (Fig. 6, PL. 1)

位置 X 3~4、Y 21グリッド 主軸方向 (N-53° - E) 形状等 不明。東西 (2.52) m、南北 (0.78) m、壁現高14cmを測る。面積 (2.71) m<sup>2</sup> 床面 平坦な床面。竈 不明。

重複 H-1 と重複しており、新旧関係は本遺構 → H-1 の順である。時期 埋土や出土遺物から 5 世紀前半と考えられる。出土遺物 総数 95 点。そのうち、土器 1 点を図示した。

#### H-4号住居跡 (Fig. 7)

位置 X 1~2、Y 21~22グリッド 主軸方向 (N-22° - E) 形状等 トレンチによる部分的な検出のため、不明。東西 (3.00) m、南北 (3.20) m、壁現高36cmを測る。面積 (3.79) m<sup>2</sup> 床面 ほぼ平坦な床面。P<sub>1</sub> (長軸×短軸×深さ、形状: 22×18×18.5cm、円形)、P<sub>2</sub> (長軸×短軸×深さ、形状: 25×14×15cm、楕円形)、P<sub>3</sub> (長軸×短軸×深さ、形状: 32×28×18.5cm、円形)、P<sub>4</sub> (長軸×短軸×深さ、形状: 66×52×18cm、楕円形) の 4 基を検出した。

竈 不明。重複 H-5 と重複しており、新旧関係は H-5 → 本遺構の順である。時期 埋土や出土遺物から 5 世紀終末から 6 世紀初頭と考えられる。

出土遺物 総数44点。

#### H-5号住居跡 (Fig. 7、PL. 2)

位置 X 2、Y 22・23グリッド 主軸方向 (N-175° - E) 形状等 トレンチによる部分的な検出のため、不明。東西 (1.55) m、南北 (4.70) m、壁現高44cmを測る。面積 (3.50) m<sup>2</sup> 床面もほぼ平坦な床面。P<sub>1</sub> (長軸×短軸×深さ、形状: 77×67×48cm、円形、貯蔵穴) の1基を検出した。竈 不明。重複 H-4と重複しており、新旧関係は本遺構→H-4の順である。時期 埋土や出土遺物から5世紀終末から6世紀初頭と考えられる。出土遺物 総数78点。そのうち、土器2点を図示した。

#### H-6号住居跡 (Fig. 7)

位置 X 2~3、Y 23・24グリッド 主軸方向 (N-66° - E) 形状等 方形。東西 (4.30) m、南北 (2.30) m、壁現高35cmを測る。面積 (7.73) m<sup>2</sup> 床面 平坦な床面。竈 不明。重複 W-1と重複しており、新旧関係は本遺構→W-1の順である。時期 埋土や出土遺物から5世紀終末から6世紀初頭と考えられる。出土遺物 総数258点。

## 2 溝 跡

#### W-1号溝跡 (Fig. 7、PL. 2)

位置 X 2~3、Y 23・24グリッド 方位 東より N-75° - E の方向で西へ進む。形状等 断面は逆台形を呈し、上幅 (179) ~ (173) cm、下幅74~61cm、深さ106~86cm、長さ (5.5) m を測る。時期 埋土からAs-B降下以前の溝跡と思われる。出土遺物 総数501点。

#### W-2号溝跡 (Fig. 7)

位置 X 1~3、Y 19~23グリッド 方位 北壁より N-156° - E の方向で南へ10.6m進み、そこから二条に分かれ、一条は N-60° - E の方向で東へ4.1m進み、東壁にぶつかる。もう一条は、一旦消滅した後、東より N-70° - E の方向で西へ3.3m進み、西壁にぶつかる。形状等 断面はU字形を呈し、上幅48~18cm、下幅25~10cm、深さ18~5cm、長さ (18.00) m を測る。時期 埋土と出土遺物からAs-B軽石降下以降の溝跡と思われる。出土遺物 総数135点。

#### W-3号溝跡

位置 X 2~3、Y 19~23グリッド 方位 北壁より N-156° - E の方向で南へ10.9m進み、そこから N-5° - E の方向で更に南に7.1m進み、消滅する。形状等 断面は逆台形を呈し、上幅64~27cm、下幅30~10cm、深さ36~17cm、長さ (18.00) m を測る。時期 埋土から近世の新しい溝跡と思われる。出土遺物 総数55点。

#### W-4号溝跡 (Fig. 6)

位置 X 0~2、Y 20~21グリッド 方位 西壁より N-62° - E の方向で東へ進み、消滅す

る。 形状等 断面はU字形を呈し、上幅78~50cm、下幅44~28cm、深さ29~10cm、長さ(6.00)mを測る。 時期 AS-B軽石混土層を切り込んで溝が構築されていることや出土遺物からAs-B軽石降下以降の溝跡と思われる。 出土遺物 総数35点。

#### W-5号溝跡 (Fig. 7)

位置 X 1、Y 21グリッド 方位 N-75°-E の方向で東西に走る。 形状等 断面は(逆台形)を呈し、上幅246~195cm、下幅200cm、深さ20cm、長さ(1.10)mを測る。 時期 墓土から6世紀初頭以前の溝跡と思われる。 出土遺物 総数0点。

### 3 土 坑

#### D-1号土坑 (Fig. 6)

位置 X 3、Y 21グリッド 形状等 平面形状は不明、長軸(74)cm、短軸(50)cm、深さ(45)cmを測る。 重複 W-2と重複しており、新旧関係はW-2→本遺構の順である。

時期 不明。 出土遺物 総数0点。

### 4 柱 穴

#### P-1号土坑 (Fig. 6)

位置 X 2、Y 22グリッド 形状等 平面形状は円形を呈し、長軸31cm、短軸30cm、深さ33cm測る。 時期 不明。 出土遺物 総数0点。

### 5 井 戸 跡

#### H-1号井戸跡 (Fig. 6、PL. 2)

位置 X 3、Y 22グリッド 形状等 平面形状は椭円形を呈し、長軸190cm、短軸150cm、深さ(111.5)cmを測る。 重複 H-1と重複しており、新旧関係はH-1→本遺構の順である。

時期 H-1の床面に直接築成土が盛られていることから5世紀終末から6世紀初頭の井戸跡と思われる。 出土遺物 総数14点。そのうち、土器1点を図示した。

### 6 グリッド等出土遺物

小破片を含め総数647点の遺物を出土した。そのうち、石製模造品1点を図示した。

## Ⅳ 考 察

本遺跡では、古墳時代の遺構としては竪穴住居跡6軒と溝跡1条、平安時代の遺構としては溝跡1条、中世の遺構としては基壇状遺構1基、溝跡1条、近世の遺構としては溝跡2条が検出された。ここでは、古墳時代、平安時代、中世、3つの時期について、山王若宮遺跡、山王若宮II遺跡と絡めながら考察したい。

### 古墳時代

まず、竪穴住居跡についてであるが、時期は4世紀終末と考えられる住居跡が1軒、5世紀前半と考えられる住居跡が1軒、5世紀終末から6世紀初頭と考えられる住居跡が4軒である。先に調査された2遺跡では、時期の不明な住居跡4軒を除き4世紀代の住居跡13軒の検出であった。また、3遺跡や周辺の遺跡にも4世紀以前の住居跡がほとんどないことや山王若宮II遺跡から石田川期初期のS字口縁台付き甕が検出されていることから、4世紀に入り石田川式土器を携えた人々がこの地に初めて集落を形成したと考えられる。

Tab.1 山王若宮3遺跡の住居跡とその時期

時 期	4世紀			5世紀			6世紀
	前半	半ば	後半	前半	半ば	後半	前半
遺跡名							
山王若宮遺跡			4 4 3				
山王若宮II遺跡	1	1					
山王若宮III遺跡				1 1			4

この地は旧利根川沿いの前橋台地東端の自然堤防上の微高地で、ここを南端とし帯状に北北西の方向にのびていく。そして、広瀬古墳群もこの帯状の微高地と一致してくる。3遺跡で主に検出されている4世紀代の住居跡と時期的に一致する古墳は、北北西約2.5kmの八幡山古墳、前橋天神山古墳を中心とする古墳群である。この古墳群を中心に、その周辺に4世紀の集落が形成され次第に拡大し、6世紀頃には今回の調査区でも濃密な分布を見せるものと考える。また、調査が行われていないため想像の域であるが、本調査区から約2km離れた同じような低地上に古墳時代の水田跡が検出されていること（北関東自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査）から、集落の周囲はこの時期の水田跡があるのではないかと思われる。この地域の4世紀代の生活域と墓域と生産域が推測できるのかもしれない。今後の調査が待たれるところである。

広瀬古墳群における墓域の変遷をみてみると、古墳時代前期は八幡山古墳・前橋天神山古墳を中心にある程度まとまって点在する。古墳時代中期になると、代表的な古墳としては盾形の二重周堀を持つ前方後円墳の広瀬轄巻塚古墳があり、分布範囲が広がる。更に、古墳時代後期の古墳は群集墳として、次第に墓域を周辺に拡大していったものとみられる。山王若宮遺跡周辺の古墳はほとんどがこの時期のもので、とりわけ6世紀後半から7世紀前半頃のものが集中する傾向を見せている。

## 平安時代

W-1号溝跡は、当初本調査区のすぐ東に当たる山王若宮遺跡で円墳が7基確認されていることもあり、古墳の周堀ではないかと考えていた。しかし、埴輪片が多数確認されたことはあるが、それとともに石田川式土器の破片が確認されたり、中世の瀬戸物片や内耳土器片が検出された。また、W-1は部分的な検出であるが、円墳の周堀のように湾曲しているようには見えず直線的に見えること、山王若宮遺跡の周堀に比べとても深い逆三角形に近い形であること、埋土がA s-B軽石純層に近いこと等から、平安時代末期の溝跡と判断した。しかし、埋土の状況、後の中世の基壇状遺構との関係で、その外周をめぐる溝とみることも可能である。出土遺物については、周りの古墳に伴う埴輪片や住居に伴う土器片が流れ込んだと考えた。

## 中世

本遺跡の調査の1つの目的として、基壇状の遺構が中世の基壇になるのか確認するということがあった。試掘調査の結果、一部分にA s-B軽石純層をつき固めたような中世の基壇状の遺構が確認されていた。この基壇状遺構は、A s-B軽石純層を固め、方形（一辺が三尺、90cm）の井桁状の溝状遺構が規則正しく掘り込まれていた。当初、溝状遺構が十字に交差する箇所に柱穴があり、その柱を固定し床を張るためにその溝状遺構に枕木を埋め込んだのではないかと考えた。調査の結果、交差した箇所では柱穴は確認できず、少しづれたところで柱穴を1基確認するにとどまった。また、ところどころ柱穴を確認のためにトレンチを入れてみたがそれ以外に柱穴は検出できなかった。よって、この基壇状の遺構の上に掘立柱建物が立っていたことは実証できなかった。しかし、柱が存在していないとしても、溝状遺構に枕木を埋め込み、その上に床を張る等の構造も考えられ、何らかの除湿の作業と考えた。調査中悩まされた湧水の量を考えるとW-2号溝跡は排水施設の可能性もあり、同時期に構築されていた一連の遺構である可能性も捨てきれない。何らかの中世の生活上の遺構であることは確実で、この地における人々の生活の跡が中世まで広がった意義は大きい。

## 参考文献

・上毛古墳総観	1938	群馬県
・前橋市史 第一巻	1971	前橋市編さん委員会
・後閣II遺跡	1983	前橋市教育委員会
・後閣団地遺跡	1983	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
・平成10年度事業概要 北関東自動車道地域 埋蔵文化財発掘調査事業	1998	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
・山王若宮遺跡	1998	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
・西田Ⅲ遺跡	1999	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
・群馬県遺跡大事典		
・群馬県埋蔵文化財調査事業団編	1999	上毛新聞社
・山王若宮II遺跡	2000	前橋市埋蔵文化財発掘調査団

Tab. 2 出土遺物観察表

番号	遺構 層位	器種	①口徑 ②器高	③胎土 ④焼成 ⑤色調 ⑥造形度	器種の特徴・整形・調整技術	備考
1	H-1 墨土	壺 土器器	① [16.0] ② (30.8)	③中粒④良好 ⑤にぶい褐色⑥1/2	口縁部：わずかに造形。外傾、横推で。体部：口縁部との交換点に指圧痕有。中位に唇垂大径を持ち、外面窓附り、内面窓附。底部：突出底足、窓附。	
2	H-1 床直	壺 土器器	① [24.0] ② (7.0)	③細粒④良好⑤にぶい 黄褐色⑥口縁部のみ	口縁部：外傾から端部外反、横推で、中央部に不明瞭な凸線有。体部：ほぼ 厚い器肉	
3	H-1 床直	壺 土器器	① [25.6] ② (11.6)	③細粒④良好 ⑤にぶい黄褐色⑥1/8	口縁部：短く外反、横推で、指圧痕有。体部：上位外側窓附削り、内面窓附 り後窓附。底部：欠損。	
4	H-1 床直	壺 土器器	① — ② (9.2)	③中粒④良好 ⑤褐色⑥1/2	口縁部：欠損。体部：外・内面窓附削り後、窓附。底部：丸底、外・内面窓附 り後窓附。	
5	H-1 墨土	壺 土器器	① [12.4] ② (5.2)	③細粒④良好 ⑤黒褐色⑥1/2	口縁部：短くわずかに内側、横推で。底部：丸底、外窓附削り、内窓附で後 窓附。	
6	H-1 墨土	壺 土器器	① [12.4] ② (4.3)	③中粒④良好 ⑤明赤褐色⑥1/3	口縁部：短く外傾、横推で。体部：丸底、外窓附削り、内窓附後、窓附。	
7	H-1 墨土	壺 土器器	① [13.0] ② (5.3)	③細粒④良好 ⑤褐色⑥1/5	口縁部：直立から端部外反、横推で。底部：浅い丸底、外面窓附削り、交換点 に後窓附。内窓附で後、窓附。	
8	H-1 墨土	石 瓦	①最 外 2.7 ②最大幅 1.1 ③最大厚 0.5	④横造品 ⑤重 さ 2.6 ⑥造形度 4/5 ⑦石 材 滑石	勾玉。丁寧な作り。	
9	H-2 墨土	壺 土器器	① 12.0 ② (6.0)	③中粒④良好 ⑤灰白⑥1/4	口縁部：不明瞭なS字口縁、横推で。体部：上位外側窓附・斜め刷毛目有、口 縁部との交換点に窓附削り有。内窓附で、口縁部との交換点に横推目有。中 ・下位欠損。台部：欠損。	
10	H-2 墨土	壺 土器器	① [15.4] ② (9.0)	③細粒④良好⑤にぶい 褐色⑥口縁部1/3	口縁部：外傾、横推で。体部：上位外側窓附刷毛目有、内窓附の刷毛目有、 輪廻み底有。底部：欠損。	
11	H-2 墨土	小型壺 土器器	① 14.6 ② 12.2	③中粒④良好 ⑤にぶい赤褐色⑥1/2	口縁部：外傾、外側窓附で、内窓附削り、内窓附。 底部：小さい平底、窓附。	
12	H-2 墨土	壺 土器器	① — ② (13.5)	③中粒④良好 ⑤にぶい褐色⑥1/2	口縁部：欠損。体部：外頂上・下位窓附削り、中位窓附削り有。内窓附削り後 窓附。底部：小さい平底、窓附。	
13	H-2 床直	高 壺 土器器	① [16.8] ② (7.3)	③中粒④良好 ⑤褐色⑥1/4	杯状：平底球味の底から緩やかに外傾し、横推での口縁部に至る。体部：外 窓附削り。内窓附で後、窓附。台部：外窓附削り、ほぼ欠損。	
14	H-2 床直	壺 土器器	① [13.6] ② 8.0	③中粒④良好 ⑤褐色⑥1/2	口縁部：短く外傾、外窓附削り、内窓附削り。体部：外窓附削り、 内窓附で。底部：外窓附削り、内窓附中心から放射線状に窓附。	埋文土器
15	H-2 墨土	壺 土器器	① [13.6] ② (5.0)	③細粒④良好 ⑤明赤褐色⑥1/3	口縁部：外傾口、横推で。底部：丸底、外窓附削り。内窓附で後、窓附。	
16	H-2 床直	壺 土器器	① 7.2 ② 5.4	③細粒④良好⑤にぶい 褐色⑥はさみ形	口縁部：内傾、横推で。体部：外窓附削り。内窓附で後、窓附。底部：平 底、外窓附削り。	
17	H-3 墨土	壺 土器器	① [10.4] ② 15.3	③中粒④良好 ⑤褐色⑥3/4	口縁部：外傾、外窓附削り。内窓附で。体部：中位や下位に最大径を持ち、 外側上半斜め窓附、下半横窓附。内窓附で。底部：小さく突出した平底 有。	
18	H-5 床直	壺 土器器	① [17.0] ② (17.0)	③中粒④不良 ⑤にぶい褐色⑥1/6	口縁部：外傾、外窓附削り。内窓附目有。体部：外窓附削り、内窓附で、 刷毛目有。底部：欠損。	
19	H-5 床直	壺 土器器	① 15.6 ② 5.5	③中粒④良好 ⑤褐色⑥定形	口縁部：直立から端部外傾、横推で。底部：口縁部の交換点に後窓附。浅い丸 底、外窓附削り。内窓附削り。	
20	I-1 墨土	壺 土器器	① [14.0] ② (8.0)	③中粒④良好 ⑤にぶい赤褐色⑥1/10	口縁部：短く外傾、横推で。指圧痕有。体部：上位一筋造品、内・外窓附削 り。中・下位欠損。底部：欠損。	
21	アリット 墨土	石 瓦	①最 外 3.5 ②最大幅 2.2 ③最大厚 0.4	④横造品 ⑤重 さ 5.7 ⑥造形度 完形 ⑦石 材 滑石	彫形品。8の石製横造品より繊細な作り。	

注) ①層位は、「床直」：床面より10cm未満の層位からの検出、「墨土」：床面より10cm以上の層位からの検出の2段階に分けた。範内の検出について「墨内」と記載した。

②口径、高さの単位はcmであり、重さの単位はgである。現存値を( )、復元値を[ ]で示した。

③胎土は、粗粒(0.9mm以下)、中粒(1.0~1.9mm以下)、粗粒(2.0mm以上)とし、特徴的な鉱物が入る場合に鉱物名等を記載した。

④焼成は、良・良好・不良の三段階とした。

⑤色調は、土器外側で觀察し、色名は新標準土器色帳(小山・竹原 1976)によった。

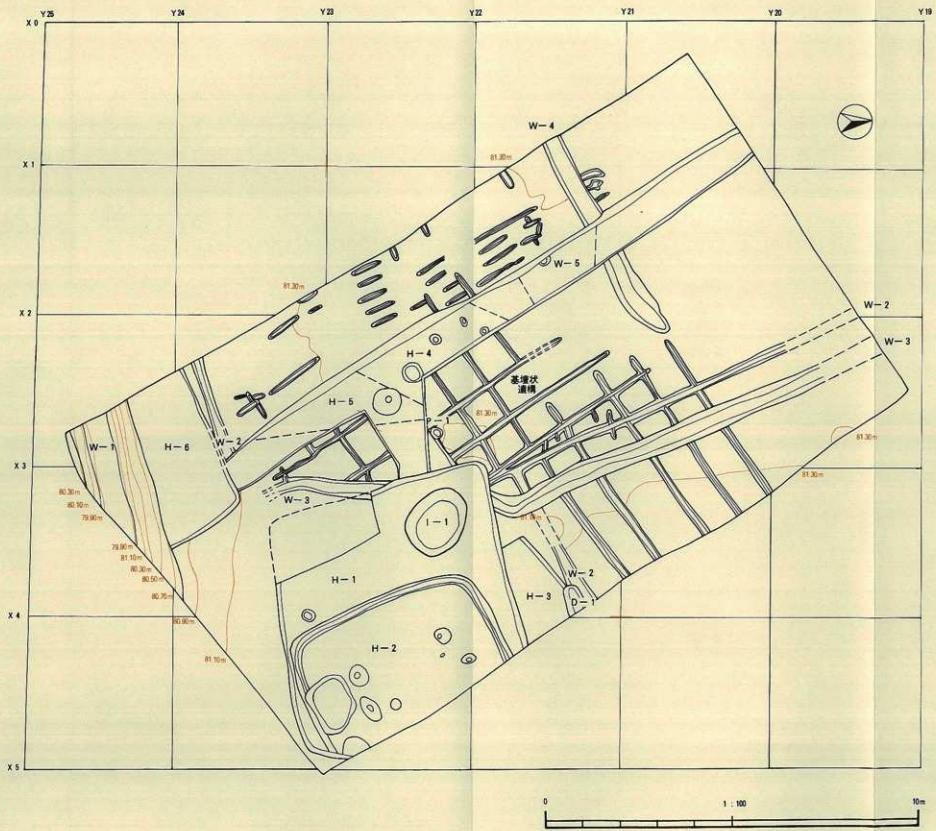


Fig. 5 山王若宮遺跡全体図

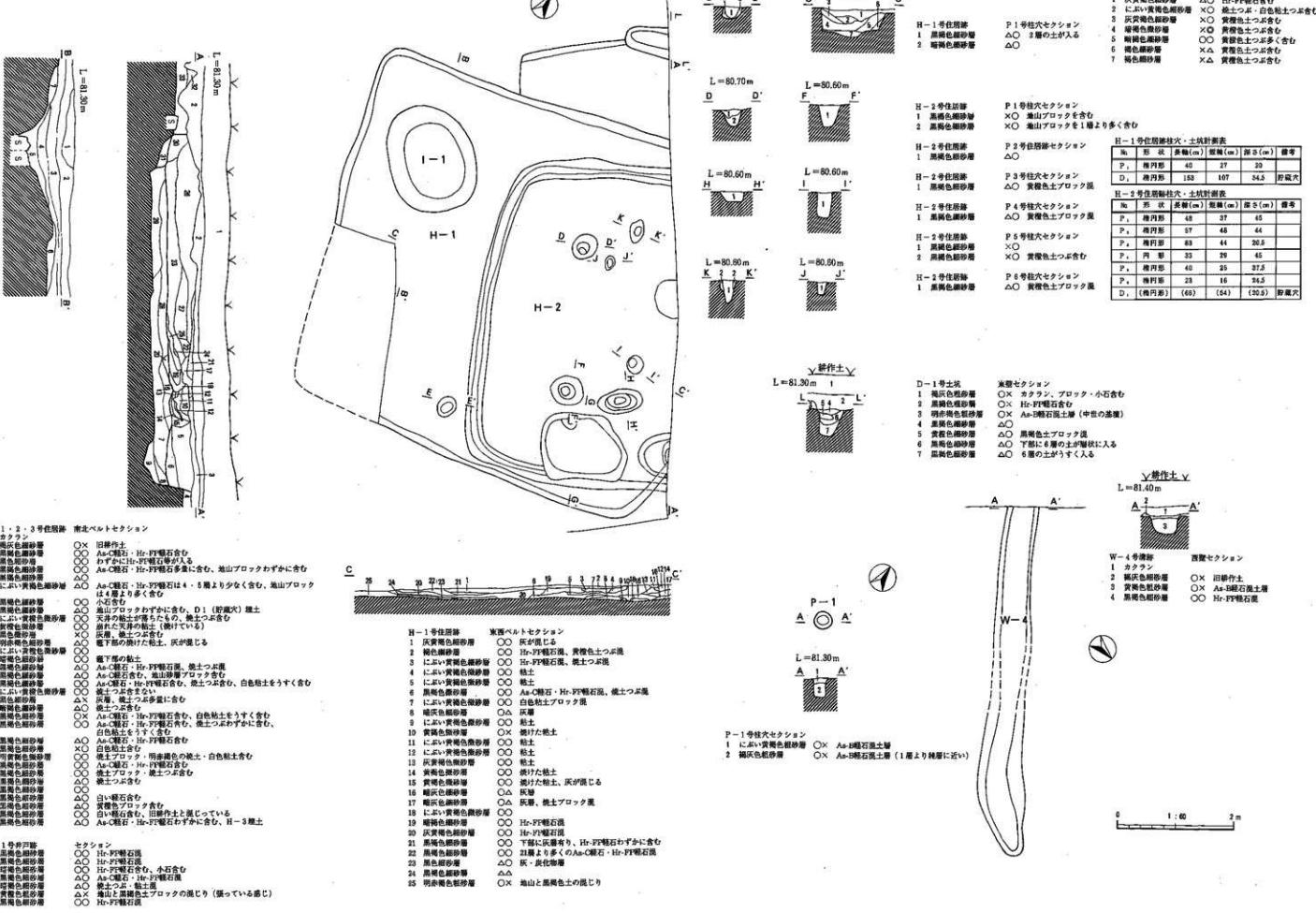
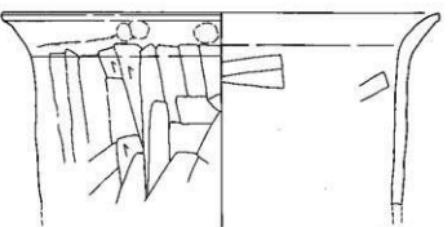
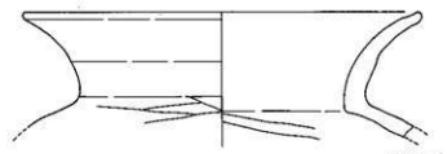
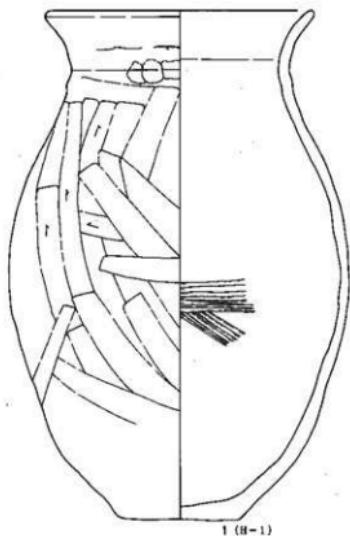
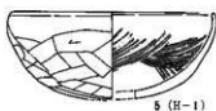


Fig. 6 H-1 ~ 3号住居跡、W-4構築跡、D-1土塁、P-1柱穴

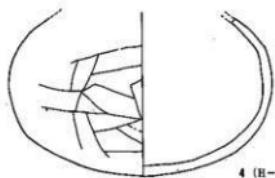




1 (H-1)



5 (H-1)



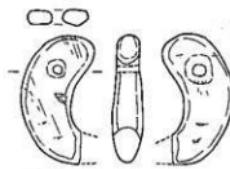
4 (H-1)



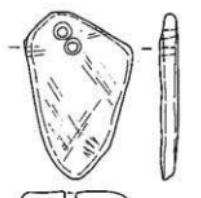
6 (H-1)



7 (H-1)



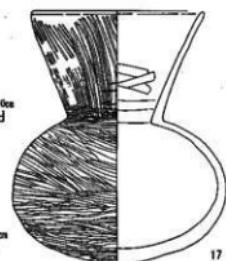
8 (H-1)



21 (グリッド)

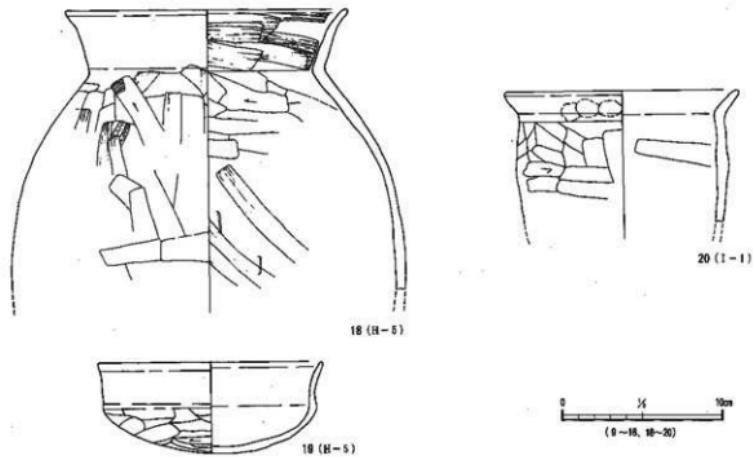
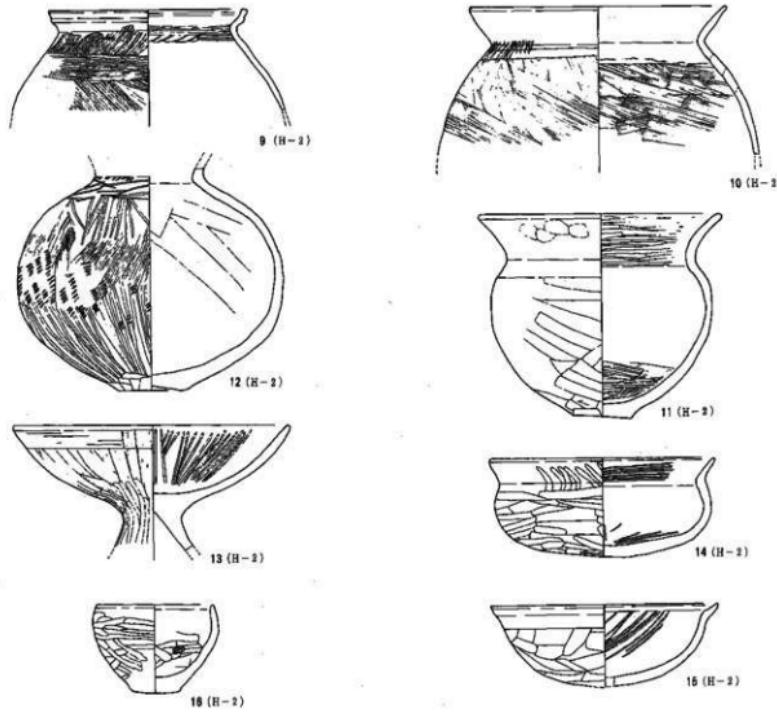
0 5cm  
(1~7, 17)

0 5cm  
(8, 21)



17 (H-3)

Fig. 8 H-1・3号住居跡、グリッド出土遺物

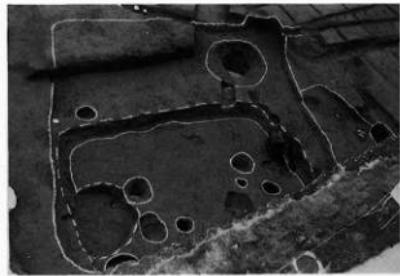


0 10 20  
 (9~16, 18~20)

Fig. 9 H-2・5号住居跡、I-1号井戸跡出土遺物



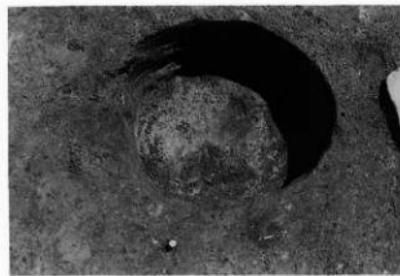
調査区全景 (東から)



H-1・2・3号住居跡全景 (東から)



H-1号住居跡全景 (東から)



H-1号住居跡P1号柱穴全景 (西から)



H-2号住居跡全景 (南から)



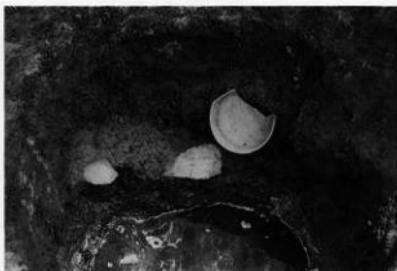
H-2号住居跡出土遺物 (西から)



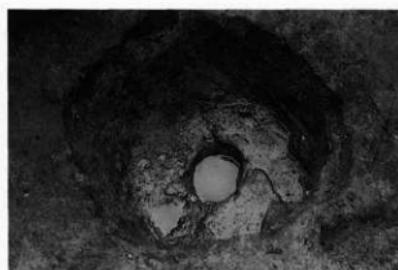
H-2号住居跡 P5号柱穴出土遺物 (西から)



H-3号住居跡出土遺物 (西から)



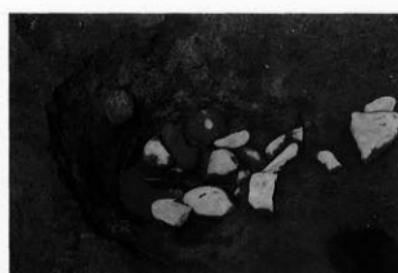
H-5号住居跡 P1号柱穴(貯蔵穴)出土遺物 (西から)



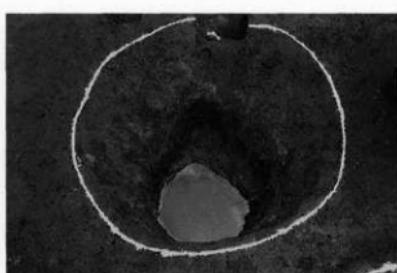
H-5号住居跡 P1号柱穴(貯蔵穴)全景 (北から)



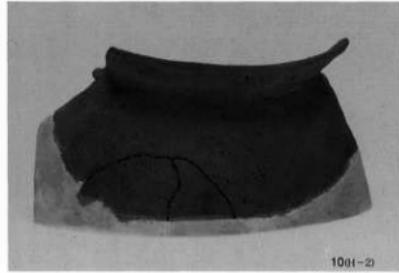
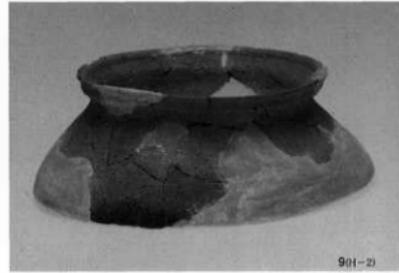
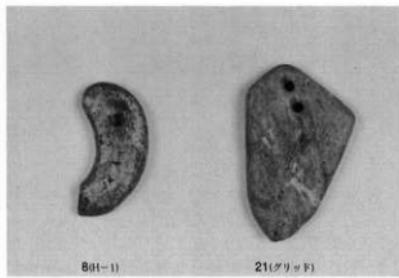
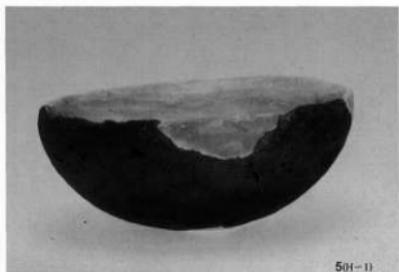
W-1号溝跡全景 (南から)



I-1号井戸跡石の落ち込み全景 (南から)



I-1号井戸跡全景 (西から)



**PL.4**



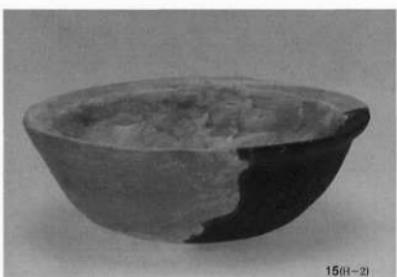
11(H-2)



13(H-2)



14(H-2)



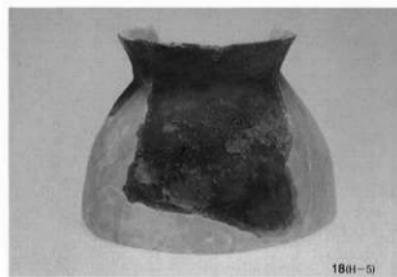
15(H-2)



16(H-2)



17(H-3)



18(H-5)



19(H-5)

抄  
錄

フリガナ	サンノウワカミヤサンイセキ
書名	山王若宮Ⅲ遺跡
副書名	老人保健施設増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
番次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	齊木一敏・近藤雅頼
編集機関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
編集機関所在地	〒371-0018 群馬県前橋市三俣町二丁目10-2
発行年月日	西暦2002年3月22日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		位 置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北 緯	東 経			
サンノウワカミヤサンイセキ 山王若宮Ⅲ遺跡	マエシシサンノウマチ 前橋市山王町134他	10201	13G18	36°20'48"	139°07'39"	20010710 20020322	約 285m <sup>2</sup>	老人保健施設増築工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山王若宮Ⅲ遺跡	集落跡	古墳～近世	住居跡、溝跡、土坑、柱穴、井戸跡	土師器 石製品 他	なし

**山王若宮Ⅲ遺跡**

平成14年3月20日 印刷  
平成14年3月22日 発行

編集発行 前橋市埋蔵文化財発掘調査団  
前橋市三俣町二丁目10-2  
TEL 027-231-9531  
印 刷 株式会社 翔文社 印刷所  
前橋市大手町三丁目18-7  
TEL 027-231-2597